

# 暗黒の欠片 VOL.2

奇怪伯爵

## 地下に潜む者1

---

便宜上、その対象を『彼』と呼ぶことにしよう。

彼の生い立ちは、およそ人間とは思えないものだった。

いや、彼が人間であるかも、的確な表現と言えるかは自信がない。

しかし、少なくとも人間と同じ機能を有し、考える力を持ち、そして感情を持つ存在であることは間違いない。

幾多の、禁断とも云える薬品の投与。

情報の収集。

本質の破壊と異質の誕生。

ミクロのレベルで徹底管理された無菌室で生れながら、彼の存在は皮肉にも汚染された存在だった。

誕生後の彼の記憶は、直ぐに彼の脳に蓄積された。

つまり、彼は赤子の時の記憶すら、思い出すことができるのだった。

白衣を着た人間たち。

彼の周りは、その存在しかなかった。

父も、母もない。

彼に愛情を注ぐものは、いない。

もし、この時に父母の愛を知っていたら、彼の将来は別のものになっていたのかもしれない。

彼は、毎日を怯えて過ごした。

白衣の者は、無造作に彼を扱う。

時には、強烈な痛みを伴う針を彼の皮膚に突き刺したり、気分がひどく悪くなる液体を飲ませたりした。

恐怖が蓄積される毎日。

彼の境遇に同情してくれる者は、誰もいなかった。

やがて、恐怖と苦痛が爆発した。

日々行われる行為は、明らかに彼の心を貪り、蝕み、侵食した。

何か、熱い塊のようなものが、彼の頭の中で破裂した。

彼はその感情に任せて声をあげ、必死の抗議を試みた。

白衣の者が、恐怖に顔を引き攣らせていた。

今迄に、見たこともない表情だった。

彼は、さらに感情を外に出す。

それが、世にもおぞましい咆哮となって白衣の者に届いた。

大きな混乱が生じ、その隙をついて彼は初めて一つの閉鎖された空間から外に出ることができた。

その時、彼が何歳であったのか。

閉鎖された研究病棟の記録によって、1歳6か月という事実が記録されていた。

## 地下に潜む者2

---

彼が外界に出ることができたのは、一つの奇跡といえた。

迷路のような複雑な研究病棟内。

多数の白衣の者たちが、必死になって彼を搜索した。

逃亡することは、彼の身体に大きな負担となった。

左右の足の長さが違うため、彼の歩行能力は著しく低い。

時には、四本の腕を使いながら、這うように移動することもあった。

恐怖と苦痛は、外に出た後も続いた。

もし、白衣の者たちに発見されたら、次はどんな仕打ちが待っているのか。

予測もできない恐怖が、常に彼には付きまとっていた。

そうやって、どれだけの時間が過ぎたのだろう。

神が彼の境遇に同情したのか。

それとも、悪魔が彼を助けたのか。

いずれにせよ、彼は恐るべき場所から脱出することができた。

古い下水道を通り、彼は決して日の当たらない闇の空間を探し出したのだった。

あまりに広大な空間と闇が、彼の存在を包み隠した。

しかし、そこはあまりに不衛生で、汚染された世界だった。

恵まれない空間ではあったが、そこにも他の生命が存在していた事実があった。

この事実は、彼の生存の可能性を示唆するものだった。

彼は、そこに生息する奇怪な虫や動物を食糧とし、命をつなぐようになる。

彼は、知らなかった。

この世界では、白衣の者たちは決して生き永らえないことを。

これは、彼にだけ与えられた特別な能力だということ。

彼の体内に蓄積された薬品が、想定外の免疫抗体を作りだしている結果だった。

それを、進化といえるのだろうか。

彼の生存能力が高められていく一方、その容姿はより醜悪なものとなっていた。

それは、彼の棲む世界の生物と同様の現象であった。

ただ彼の場合、その変化が極めて短時間の内に起きるのだった。

生物が長い時間をかけて環境に適応する進化過程。

彼は、神をも超える能力を持ってしまったのかもしれない。

環境の適応は、明確に身体に影響した。

皮膚は黒ずみ、硬質化を繰り返した。

指は長く、爪が鋭く伸びた。

顎が強化され、歯は牙へと変化した。

どれも、本人に自覚がないままもたらされた彼固有の特徴であった。

おそらく、体の内部にある各器官も、同様の進化をみせていたに違いない。

## 地下に潜む者3

---

最悪な環境だったが、彼は日々を生き延びた。

生きるための生活。

彼に知能が備わっていなければ、その暮らしは下等動物と同様、寿命を待って終焉したのであろう。

しかし、現実はそうでなかった。

漆黒の世界。

そんな空間にも、彼の生活を脅かす存在が現れるのだった。

それは、単体で現れることはなかった。

普段は、必ず複数でやってきた。

不愉快な音を発し、眩い光線を振りかざしてやってくる。

その音に、聞き覚えがあった。

そう、白衣の者たちが発していた音。

奴等は、それで意思の疎通を図っていることが漠然と理解できるようになった。

彼は、恐怖した。

奴らの目的が何であるか、それは分からない。

ただ、身体に刻み込まれた恐怖だけが、危険信号を発するのだった。

彼は闇に溶け込み、奴等をやり過ごした。

闇の中では、奴等は極めて無能だった。

転機は、ある時突然に現れた。

奴等は、何かの作業中だった。

汚水の中に片足を突っ込んだ一人が、突然絶叫した。

何やら大声で喚きながら、もう一人に向かって助けを求めているようだった。

しばらくの騒々しいやり取りの後、一人が走り去っていく。

取り残された方は、恐怖に顔を引きつらせながら、周囲を窺っている。

何かが、彼を突き動かした。

それは、単なる好奇心だったのかもしれない。

単調な生活から、無意識に脱却を試みた彼の自我かもしれない。

彼は、奴に接近を試みた。

ゆっくりと、しかし確実に距離が縮まった。

彼の接近を、奴は漠然と感じたようだ。

距離を縮める度に、奴の焦燥感は露わになっていく。

奴は不安に耐えきれなくなり、大声を上げた。

思わず、彼も大声を上げた。

あの時の、記憶が蘇る。

恐怖に怯えた白衣の者の表情が、彼の脳裏に浮かんだ。

彼は、一瞬パニックを起こした。

気が動転し、凄まじい恐怖心に支配された。

奴は彼の存在を認め、悲鳴を上げていた。

彼には、その状況を理解することはできない。

無我夢中で襲いかかるしかなかった。

自己防衛の本能が、働いたにすぎなかった。

彼の鋭い爪は、奴の喉を搔き切った。

奴は、あっさりと絶命した。

あまりに呆気ない幕切れだった。

彼は、今まで恐怖していた存在が余りに脆いものだと知った。

その日から奴等は、彼の狩りの対象となった。

## 地下に潜む者4

---

彼にとって、人間ほど都合の良い獲物は、他になかった。

奴等は、いろいろ便利な道具を持っていた。

彼の生活に役立つ物も多かった。

そして何より、人間の肉は美味だった。

皮膚は柔らかく、余計な体毛も少ない。

一度倒せば、十分な量を得ることができた。

何より汚染されていないことが、一番の魅力だった。

次第に、彼は奴等が来るのを待ちわびるようになった。

ただし、汚染された彼の領域に訪れる者は、極めて少ない。

彼の犠牲となった者たちが増えるにつれ、益々人間の訪れる機会は減っていった。

地上では、不可解な失踪を遂げる者が続出するこの領域を、忌み嫌うようになっていたのだった。

。

一度人間の味を知ってしまった彼にとって、待つことは苦痛へと変わっていた。

空腹に怒りを感じ、咆哮を放った。

暗闇の中に、恐ろしい唸りがこだました。

彼は、移動範囲を広げるようにした。

人間の脆さを知ったことによって、彼の行動は大胆になっていた。

その行動は、正解のように思えた。

彼は新たな獲物を発見し、その肉を味わうことができた。

久しぶりの、満足感が彼を覆った。

しかし、今回の狩りで、何か違和感を彼は感じていた。

犠牲となった男は、ずっとある言葉を放っていた。

そう、絶命する間際まで、ずっと……。

彼は、何故かその言葉を覚えた。

『マイク』。

それが、彼の覚えた言葉だった。

何故、男がそれを連呼していたのか？

彼には、知る由もない。

彼は戦利品として男の持ち物を漁り、少しばかりの道具を得ることができた。

最初見ただけでは使用方法が分からないものでも、彼はそれらをストックすることにしていった。

後になって、急に用途が判明することもあるからだった。

男の持ち物の中に、見知らぬものがあった。  
それが写真だということが、彼には分らなかった。  
しかし、彼はそれに強く興味を持ったようだった。  
写真の中央には、彼が殺した男が写っている。  
その横に、もう一人の人物。これは、彼に比べてもっと弱そうな存在だ。  
カメラに向かって、穏やかな笑みを浮かべている。  
しかし、彼にはその感情が理解できない。  
そして、彼はもう一人の人物に目を移した。  
先の二人の人物に比べ、かなり小さい存在だ。  
姿形は同じ様相を呈しているが、能力は圧倒的に劣っている。  
彼は、これが奴等の子供なのだと理解した。  
子供という単語は知らなかったが、地下世界の生物を捕食していた彼の知識には、その概念が既に存在していた。  
子供。  
『マイク……』  
彼は、呟いた。

## 地下に潜む者5

---

突然、静寂なる世界に喧噪が訪れた。  
今迄見たこともない数の奴等が、大挙してやってきたのだ。  
彼には、予測もつかない数だった。  
奴らの脆さを知った彼も、その数の多さには圧倒された。  
飛び交う無数の光線。  
ここを訪れる奴等は、必ずあの道具を持っている。  
わずかな光にすぎないのに、奴等はそれがないと何もできないのだ。  
慣れが、慢心となっていた。  
彼は、しばらく様子を見ることにしたのだ。  
汚水の中に身体を沈め、奴等の行動を監視した。

奴等は、彼の寢床を発見した。  
そこには、これまでの戦利品が置かれている。  
彼に殺害された、人間が持っていた道具の全てが。  
奴等は、それを発見したらしい。  
一つ一つに光線を当て、確認しているらしかった。  
奴等が、興奮気味に音を発していた。  
それを聞いて、彼は以前に殺害した男の言葉を思い出していた。  
『マイク……』

奴等は、彼の戦利品の回収を始めた。  
次々に、袋の中に回収されていく品を眺めるたび、彼の心に熱いものが湧いてきた。  
白衣の者に感じた、怒りだった。  
自分の所有物が、奪われていく。  
おそらく、彼はそのような気持でいたに違いない。  
そして、運命の瞬間が訪れる。

遠目に、奴等が何を持っているのかが分かった。  
それは、あの男が持っていた写真。  
3人が写っている写真。  
彼は、それを毎日眺めるようになっていた。  
まるで、唯一の娯楽であるかのように。  
ひょっとすると、彼の本能は写真から父母の愛情を感じ取っていたのかもしれない。  
けっして彼には注がれることのなかった感情を……。

彼は、精一杯の咆哮を放った。  
そうすることで、奴等は怯え、逃げていくはずだった。  
強力なライトが、彼に向けられた。  
今まで、そのような光線があるとは知らなかった。  
彼の目は眩み、白色の世界が目前に広がった。  
彼の口から、思わず言葉が漏れた。  
『マイク……』  
その言葉が、奴等に伝わっていた。

男は、あからさまに信じがたいという表情を浮かべ、仲間の顔を見た。  
誰もが、驚愕の色を浮かべている。  
全員が混乱をきたし、事実の解読に懸命だった。  
マイク・リューワーズの姿は、しっかりと覚えている。  
頻繁に逢っていた訳ではないが、甥の顔を忘れるはずがない。  
それに、たった今。写真で確認したではないか。  
兄が持っていた写真。  
兄夫婦とマイク。家族三人の写真。  
それが、ここにあるという事実。  
認めたくなかったが、兄に何かがあった証拠だ。  
失踪したマイクを探して、兄がここにきた証だった。  
マイクが消えて1年。  
兄は、どんなに辛い時を送っていたであろう。  
突然訪れた不幸は、兄の生活を無残にも破壊した。

自分にも、たまにマイクの笑い声が聞こえる時がある。  
声のした方向を確認するが、もちろんマイクはいない。  
兄は、それを毎日感じていたのかもしれない。

一向に成果のあがらない警察の捜索に見切りをつけ、兄は一人でマイクを捜すようになった。  
その様子は、自分も含め、彼の家族を心配させた。  
執念を超えた何かが、兄の魂に宿ったに違いなかった。

余りに強い愛情は、残酷だった。  
諦めることができたなら、兄も楽になれたかもしれない。  
そして、怖れていた日が、やってきてしまった。  
マイクに続き、兄までもが帰らぬ人となった。

『マイク……』

男は、頭を振った。

見るもおぞましい怪物が、目前に姿を現している。

存在自体、信じがたいものだ。

醜悪さは、思わず吐き気をもよおすものだった。

その化け物が、マイクの名前を告げている。

これは、何故だ？

一瞬、身の毛もよだつ想像が頭をよぎる。

まさか、こいつがマイクなのか！？

混濁した意識の中で、男はその可能性について考えを巡らせた。

その直後、大気を震わせるほどの咆哮が、男の耳を衝いていた。

男は、何もできずにいた。

この怪物が、マイクなのか？

その思いを、断つことができずにいたからだった。

怪物は、こちらに向かって猛然と近づいてきた。

男は、周囲で音が鳴るのを聞いた。

銃弾が装填される音だった。

轟音が、響く。

男を除くチーム全員が、銃口を怪物に向けていた。

白煙があがり、火薬の臭いが充満する。

男は、倒れていく怪物を呆然と眺めていた。

激しい水飛沫をあげ、怪物の姿は汚水の流れの中に消えていった。

『マイク……』

最期に放った彼の言葉が、男の耳に届いたかは分からない。

男は、ただただ嗚咽するばかりだった。

彼がマイクであろうとなかろうと、男にとって救いはなかった。

救いなど、あるはずがない。

半年後、男の姿はシアトル郊外の墓地にあった。

失踪したマイク・リューワーズの遺体が、発見されたからだった。

誘拐後、殺害された少年を、警察は探し出すことができていた。

犯人は、リューワーズ家から数ブロック先に住む、独身男性だった。

男は、今でも思い出す。

何故、あの怪物はマイクの名を知っていたのだろう、と。

暗黒の欠片 vol.2

<http://p.booklog.jp/book/18087>

著者：奇怪伯爵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkaiki0710/profile>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/18087>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/18087>